

## ギンヤンマからの生物学

佐野 護

京都府立医科大学医学部医学科生物学教室

神戸市の西の端にある垂水町は、私が育った時代には、海岸線に国道2号線、国鉄と三陽電車の垂水駅、その傍らにある細長い商店街、背後の丘には公団アパートが広がる住宅地でした。海に注ぐ福田川に沿って遡ると無舗装の一本道の両側には田畑が広がりやがて雑木林へとつながるのどかな里が共存していました。今はそのあたりに地下鉄ターミナルが出現、近代都市に生まれ変わっています。小中学校時代はそんな野山から海川、池に至るまで自然の中の遊びを満喫して過ごしました。小学生の頃の夏休みの思い出にギンヤンマ釣りがあります。オスは池や田んぼにテリトリーを決めて、ぐるぐるの周回飛行を続けていて、メスを糸に結わえて飛ばせば、寄ってくるオスが難なく捕えられました。しかしメスは、普段は姿を見せず、なかなか貴重なものなのです。小学生のいたずらで、オスに絵の具を塗ってみたところ、全てをメスらしく塗らなくても、オスの腰のブルーの部分に黄緑色に塗れば、オスはメスと認識して、人を避けることもなく寄ってきたのです。遊びながら既に生物学の実験をしていたのです、生物学を職業にしたのは、あの時の興奮がきっかけだったかと思うことがあります。同時にあの頃より特に進歩もなく、人生の大部分を終えてしまったとも感じます。生物に関する職業に向かって漠然と分野を選び、学部、大学院へと進むうちに、生物を材料にした研究を生業とするに至ったのでした。

愛知県にある心身障害の研究所に就職。この仕事は心身障害の原因を探り治療への一助となる試みが本来の役割ながら、実際にはかなり基礎的な研究を行うことが多く、欧文雑誌などへ学術論文を発表することが仕事であるように感じられました。人間は評価されたいという欲望がDNAに組み込まれているのでしょうか、若い頃は特に真剣にそのような研究活動に取り組みました。カナダのカルガリー大学へ3年間留学し、カナダののどかな生活を家族で味わうことができました。帰国した頃から、研究テーマを自分で決める立場になり、更に研究課題の成功を目指して10数年が経ちました。

教育という仕事は、社会性のある業務を果たす点が研究よりもずっと明確です。大学生時代、高校の理科の教員免許を取得する為に、高校へ教育実習に出向きました。先生に代わって、教壇に立ち生物の授業を1週間させてもらうのです。最終日の夜、指導して下さった先生のお宅へお招きを受けた時「あなたは教師に向いていますね、今からでもすぐに先生になれますよ」とお褒めの言葉を戴き嬉しかったことを覚えています。私の父親も大学の教師でしたし、教師への希望が潜在的にありました。10年前本学の教養教育の生物学担当として採用され、懐かしい京都にも戻れたことは望外の喜びでした。

医学生に教養として教える生物学は、分子や細胞の理解を中心とした医学準備型教育

の側面が大きく、学生からも歓迎され易い教科となっています。私は細胞生物学、生化学、神経化学などの分野の研究経験から、体験に基づいた知識を解説でき、この担当にかなり合致した教師ではないかと手前みそながら思っておりました。近頃の医学生は、目的の明確な事以外になかなか興味を示さない傾向が強く、教養科目の同僚の先生方のご苦勞に比べてかなり楽な教師生活を送らせてもらったと認識しています。授業、実習、ゼミなど、新米の教師は努力して学生に接し、受け入れられている感触に喜びを感じました。医大卓球部には副顧問として加えてもらい、学生部員に混じり玉を打ち合いました。いっしょに汗を流すと親しみも倍加するものです。また生物好きの1年生と夏休みにやった遊びのような研究実習の結果を学会に出掛けて発表させ、欧文論文まで書かせることになったのは良い思い出になりました。既に医師になっているその1人から、私の最終講義に出席したいので、と問い合わせがあったと聞き、本当に嬉しく思いましたが、若手医師は、土日もない厳しい勤務と聞いており、お断りしなければなりません。平成15年、府立医大の大学院重点化が認められ、正式に大学院の教授に加えられました。翌年から私の在任期間いっぱい、博士課程の院生を迎えることになりました。彼女の子育てと両立させつつの大学院生生活はなかなか大変でしたが、論文も完成し無事に学位を取得する見込となりました。府立医科大学を憂いなく退任できそうで、これも有り難いことだと思っています。

教養教育とは人間社会がこれまでに得た知識の総体を受け継ぎ、人間としてまともな常識を身に付けることです。知識や学力の基本などという内容ともう1つは広い視野に立って、柔軟に自分とは異なるものを理解しようとする人としてあるべき心の内容があると思います。教師として、生物学の知識の解説ばかりではなく、人としての心の内容を少しでも伝えられたのかについて自信はありませんが、素直に自らの考え方は話し伝えてきたつもりです。退任後も多少教師としての活動を続ける予定ですが、この府立医大の定年退職は、いわば店じまいであり、人生の締めくくりという気持ちを強く感じさせます。私の小さな人生にもいろいろな岐路がありました。その時々を持った夢は成就したかどうか、どんどん忘れてしまうのですが、幸せな人生だったと今、回顧することができます。凡人の私が、そう思えるのはかなり運に恵まれたのでしょう。同時に強く思うことは、大きな岐路を乗り切るにはいつも沢山の人の助けがあったことで、感謝の気持ちを忘れてはならないと自戒の念を覚えます。いつも気持ちの通じることの出来る家族も大きな心の支えでした。夢は、手掛かりとしてあり、遭遇する初めての経験、出会い、それが穏やかに人の心を裏打ちすることの積み重ねが人生であるように思われます。

平成20年度より京都府立医科大学は京都府立大学と1法人2大学の法人化が行なわれ、教養教育は、両大学の連携、協力の体制に向かうことが決定されています。花園学舎でこれまで行なわれて来た教養教育は大きな変化を迎えることが予想されます。単科大学の少人数の教育体制には、短所もありますが、学生と教職員の距離の近いことによる良さは大いに感じられます。大学を去るにあたり、花園学舎の教養教育が培ってきた生真面目で良い雰囲気、教師と学生の心の通い合う伝統を失うことなく、実りある教養教育の改善が進められることを切に願う次第です。